

益田道路関連浜寄代替地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

浜 寄 遺 跡

平成15年3月

益田市教育委員会

序

益田市は高津川と益田川によって形成された石見地方で最も広い平野を抱え、北は長い海岸線で日本海に面し、背後は中国山地から派生した丘陵に囲まれています。この恵まれた地勢と穏やかな気候により古くから人々が生活していたことを示す多くの遺跡や文化財が市域全体に分布しています。

さて、このたび益田道路建設に関連する浜寄代替地造成事業に伴う浜寄遺跡の発掘調査を実施したところ、弥生時代から奈良時代にかけて営まれた遺跡の一端が明らかになりました。万葉の歌人柿本人麿が活躍していた時代の貴重な資料が、しかも人麿の終焉に関わりの深い高津地区において発見されたことにはひときわ感慨深いものがあります。

さらに、今回は多くの方々に発掘調査の様子を見学していただき、発掘体験もしていただくことができたことで、地域の歴史に身近に触れていただくことができました。

本書は発掘調査の概要をまとめたものであります、広く活用していただき、地域の歴史や埋蔵文化財の保護に対する理解と関心を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたってご指導とご助言をいただいた島根県教育委員会及び調査指導の先生方、また終始ご協力をいただいた事業者である益田市土地開発公社及び地元自治会はじめとする地域の皆様、関係各位に厚く感謝を申し上げまして、報告書刊行のごあいさつといたします。

平成15年3月

益田市教育委員会
教育長 陶 山 勝

例言

1. 本書は平成14年度に益田市教育委員会が益田市土地開発公社から委託を受けて実施した、
益田道路関連浜寄代替地造成事業に伴う、浜寄遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体	益田市教育委員会 教育長 田中 稔（～平成14年12月）、陶山 勝 (平成15年1月～)
事務局	益田市教育委員会文化振興課
調査員	長澤和幸（文化振興課副主任主事）
調査指導	島根県教育委員会 広島県立美術館次長 村上勇 島根県立三瓶自然館指導員 中村唯史
3. 現地調査及び資料整理期間中には次の方々に多大なご協力をいただいた。記して謝意を表したい。
(敬称略)
板倉芳朗（島根県埋蔵文化財調査センター）、田原淳史（島根県埋蔵文化財調査センター）、
益田市土地開発公社、浜寄自治会（自治会長 龜山 将）
4. 現地調査、資料整理には次の方々に参加していただいた。
岩本木子、岩本哲夫、大久保眞紀、大谷浪江、大畠和子、岡崎敦子、岡本敬子、田中 登、
田庭道枝、中尾貞子、中村康恵、中村 了、深井一雄、藤井典子、柳井友吉、山地喜三男、
横田貞代、横山秀美、和崎幸子
5. 層図中的方位は磁北を示している。
6. 本書の執筆、編集は長澤が行った。

I. 調査に至る経過

平成12年度に、益田市土地開発公社が益田市内に計画されている国道9号バイパス、通称益田道路建設に関連して、家屋移転代替地に伴う宅地造成事業を高津浜寄地区で計画した。事業予定地を含む一帯には、平成10・11年度に実施された益田道路建設に伴う分布調査で浜寄遺跡が存在することが確認されていたことから、平成13年2月6日から平成13年2月21日にかけて事業予定地内における遺跡の残存状況及び範囲を確認するため試掘調査を行った。

その結果を受け、遺跡の取り扱いについて協議を行い、宅地部分においては盛土により遺跡が保護されることとなつたが、進入路及び排水路部分については遺跡の保存は困難であることから、平成14年度に本発掘調査を実施することとなった。

平成14年5月1日付で益田市土地開発公社から文化財保護法第57条の2の発掘届が提出され、益田市教育委員会は同年5月14日付で同法第58条の2の発掘調査通知を提出した。また、平成14年5月1日付で益田市土地開発公社と益田市教育委員会の間で発掘調査の委託契約を締結し、平成14年5月21日から平成14年7月15日まで発掘調査を実施した。

II. 遺跡の位置と歴史的環境

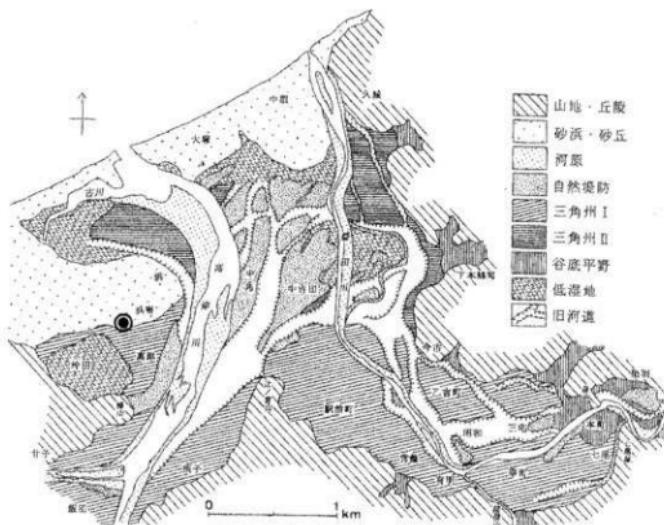
浜寄遺跡は、海岸に並行して伸びる広大な砂丘の南端から高津川によって形成された三角州にかけての境周辺に位置する。調査地の現況は畑で、北側の砂丘上には家屋が並び、南側に隣接して用水路が東西に流れる。西側には市道地方浜寄線を挟んで沖田の水田地帯が広がり、東側は畑として利用され、古代から中世にかけての遺物が広範囲に散布している。

原始・古代以降の歴史的な背景について高津地域を中心に概観してみると、砂丘上に立地した松ヶ丘遺跡では弥生時代前期から中期にかけての土器のほか、古式土師器や須恵器も出土し、埋葬遺跡の可能性が考えられている。万葉公園内では弥生時代後期の豊穴住居と奈良から平安時代の遺構が重複するサガリ遺跡や研石横穴などが調査されている。また、最近では石見空港飯田線建設工事に伴い庄屋東遺跡から骨蔵器として使われた奈良時代の須恵器の壺が出土した。

中世の高津郷は、莊園長野莊の所領単位の一つで、平安時代末期には益田（御神本）兼栄、兼高父子が所領していた。弘安の役（1281年）の後、鹿足郡に新補された吉見頼行の子長幸は高津に所領を得て高津氏を称し、南北朝時代には高津城（小山城）を拠点に北朝方の益田氏と抗争を続けた。天正19（1591）年の美濃郡益田元祥領検地目録には高津浦屋敷鐵船役料との記載があり、高津が港湾としての機能を備えていたことがわかる。

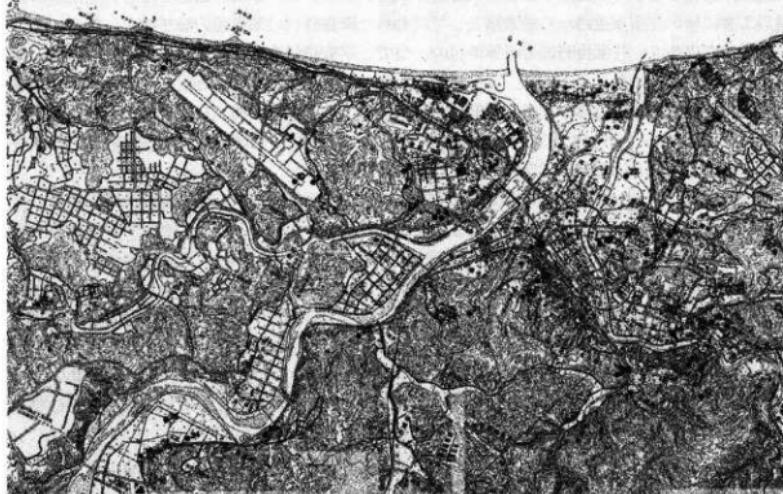
元和3（1617）年に高津村は津和野藩領となり、代官所が置かれた。藩主龜井氏は松崎にあつた柿本神社を延宝9（1681）年に現在地に移転再建した。さらに、河港を確保するため高津川の改修をたびたび行うとともに、高津に紙座や蝋座を置いた。宝永4（1707）年には庄屋長嶺嘉左衛門が蟠竜湖から暗渠を掘って沖田平野に水を引き、一帯の新田開発が進んだ。幕末には八本松に異国遠見番所が置かれ、長者原に台場が設けられた。江戸中期に創設された鋳造場（古釜屋）は幕末に藩の大砲製造所となった。

このほか、益田市内には三角縁神獣鏡出土土地や大元1号墳、スクモ塚古墳、小丸山古墳などの首長墓が益田川右岸側に分布し、中世では七尾城跡や三宅御土居跡など益田氏関連遺跡や社寺が益田地区を中心にまとまって残り、山城跡も広く分布している。



第1図 地形分類図

1. 永平	5. 高麗	10. Pフ被装の墓	15. 石室の穴窟	20. 日出地盤の墓	25. 青瓦古墳群	30. 田中古墳群
2. 安可王	6. 砂利可	11. 大陵古墳	16. 秋葉山古墳	21. 中原市船橋塚古墳(市史跡)	26. 青瓦古墳群	31. 塚原古墳
3. 仁祖	7. フノリ	12. 七郎山古墳(史跡)	17. 小丸山古墳	22. 多賀山古墳	32. 船岡古墳	33. 安子山古墳
4. 仁宗(即位時慶元年)	8. 仁宗	13. 伊勢山古墳	18. 金剛山古墳出土品	23. 佐久間古墳	34. 佐久間古墳	35. 白上古墳
4. 桂林王	9. 猪口	14. 三輪山古墳	19. 四方山古墳	24. ゲイの原古墳(史跡)	29. 佐久間古墳	36. 青森古墳



第2図 遺跡分布図

III. 調査の概要

1. 調査区の設定

調査は宅地への進入路及び排水溝が予定される東西約28m×南北約6mの範囲を対象として実施し、調査面積は146.8m²を測る。

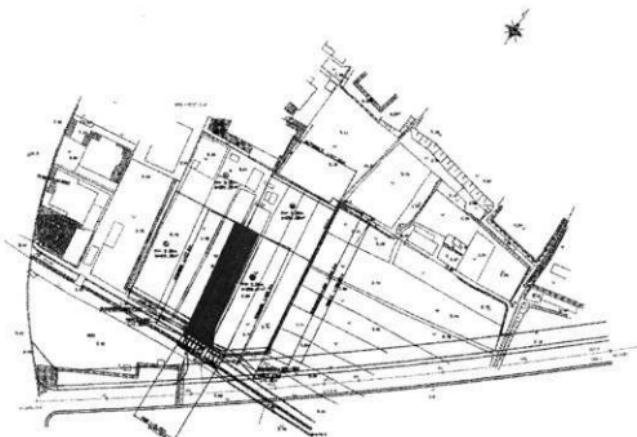
調査地においては、平成12年度に実施した試掘調査により層序及び遺物などの分布状況がある程度把握されていたことから、表土は重機で掘削した。その後、調査区を4区画に細分し、平面発掘を基本として各調査区別に人力で掘り下げ、遺物は各区別層序ごとに採り上げながら調査を進めた。また、遺物・遺構とともに皆無となる6層以下について、その下層の状況を確認するため、調査区西壁に沿って北端と南端それぞれにサブトレーンチを設定した。

2. 層位及び層序の関係

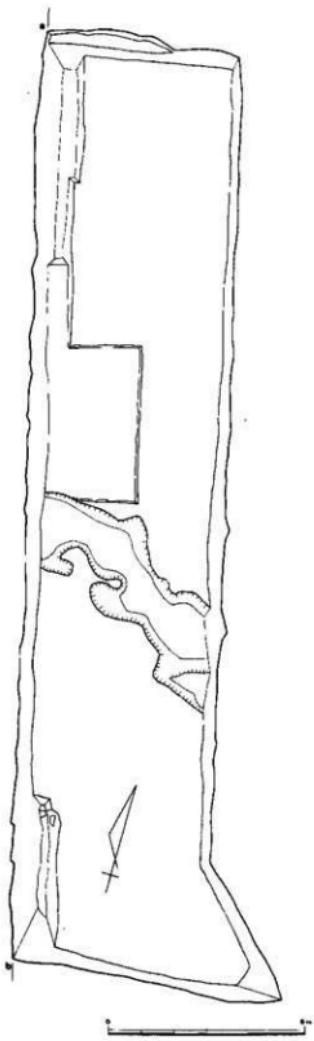
基本的な層序は、1層の畑耕作土（黒茶色土）、2層の茶褐色土、3層の暗茶色土（2cm以下の礫混じり）、4層の暗茶色砂質土（粗い砂で、1cm大の礫混じり）、5層の黄褐色砂層、6層の灰茶色土、7層の暗黒灰色粘質土、8層の黄灰色砂質土、9層の茶色礫層（5cm以下の礫）、10層の灰黒色砂礫層の順で、下部に向け堆積していた。全体的な堆積状況は、調査区中央部より北側ではほぼ水平に堆積する傾向にあり、調査区中央部から南側では、調査区の南側を流れる側溝埋設等の影響もあってか攪乱あるいは乱れる傾向にあった。

表土である1層は黒茶色を呈し、代替地が計画された最近まで畑として利用されていたが、計画後は耕作がなされておらず、ビニール類などが混在していた。層厚は、10～20cmを測る。2層は、5mm未満の礫を多く含み、近世以降の陶器器と須恵器が混在して検出された。層厚は5～25cmで、ほぼ水平に堆積する。

3層は2cm以下の礫が混じる暗茶色土で、層厚5～35cmを測り、北側に向かうほど薄く堆積する。須恵器、土師器がまとまって検出されたが、比較的須恵器の割合が高い。4層は粗い砂が多く混じる砂質の暗茶色土で、1cm大の礫も混じる。層厚20～25cmを測り、調査区中央部



第3図 調査区配置図



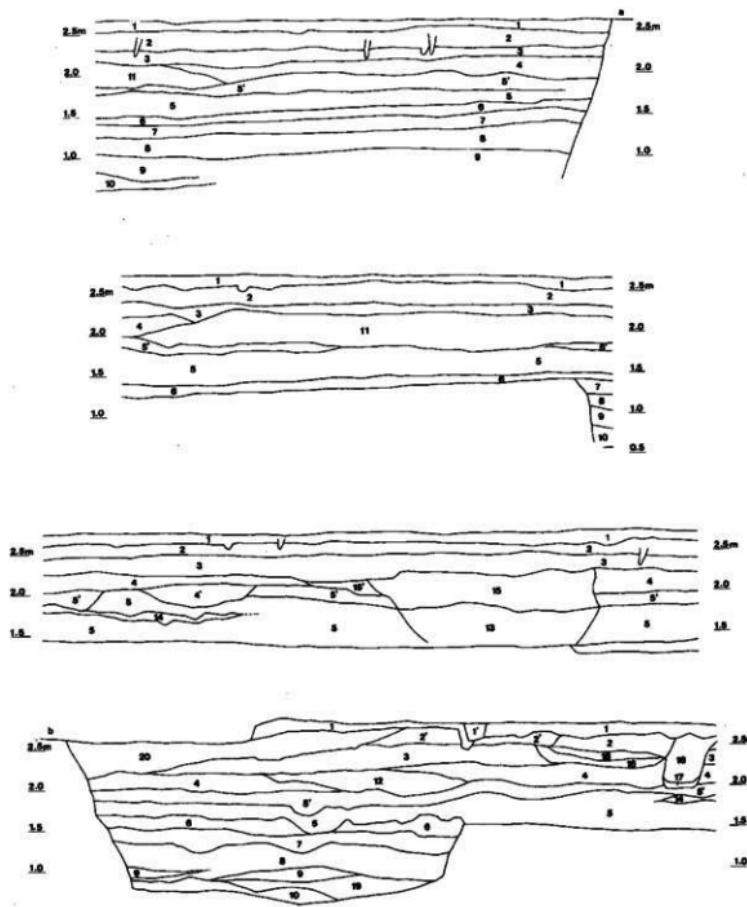
第4図 調査区全図

で若干薄く堆積していた。4層からは、土師器、須恵器が検出されたが、土師器の割合が高かった。その出土位置は、調査区南部から中央部にかけてが中心で、北側に向かって減少する傾向にあった。5層は、黄褐色を呈するきめの細かい砂層である。5層の上層には、同じ黄褐色を呈するものの、5層と比較して若干目の粗い砂層の堆積が見られたが、これを5'層とした。5層及び5'層を併せた層厚は20~70cmを測り、中央部が厚く北側及び南側に向かってそれぞれ薄くなる傾向にあった。なお、5層については、その上層が4層によって削られている可能性があり、もともとはもう少し厚みを持っていた可能性がある。この5層及び5'層は、河川の氾濫により同時期に堆積したものと考えられ、これだけの厚みをもった砂層を形成させるには相当の流量が必要であろうことから、高津川の氾濫によるものと考えられる。5層からの遺物の出土は、土師器を中心とするものであったが、弥生土器も若干確認された。出土量は、下層に向かい減少する傾向にある。

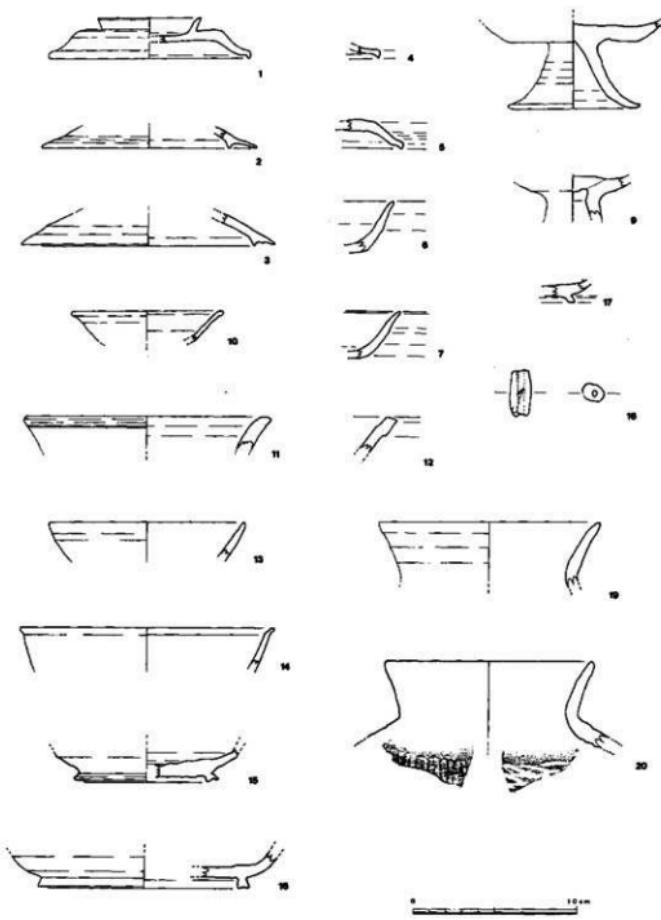
調査区北部では、5層と4層の間に暗茶色を呈する5cm以下の礫からなる礫層（11層）が堆積する。この礫層も高津川の氾濫によって別の場所に自然堆積したものであったのが、人為的に動かされ、2次堆積したものと考えられた。

6層は、灰茶色土である。層厚は10~15cmを測り、ほぼ水平に堆積する。この層には7層が混入しており、弱いながらも若干の粘性を持っている。6層以下では、遺物は検出されなかった。7層は、暗黒灰色を呈し、粘性の強い粘質土である。層厚は10~20cmを測る。

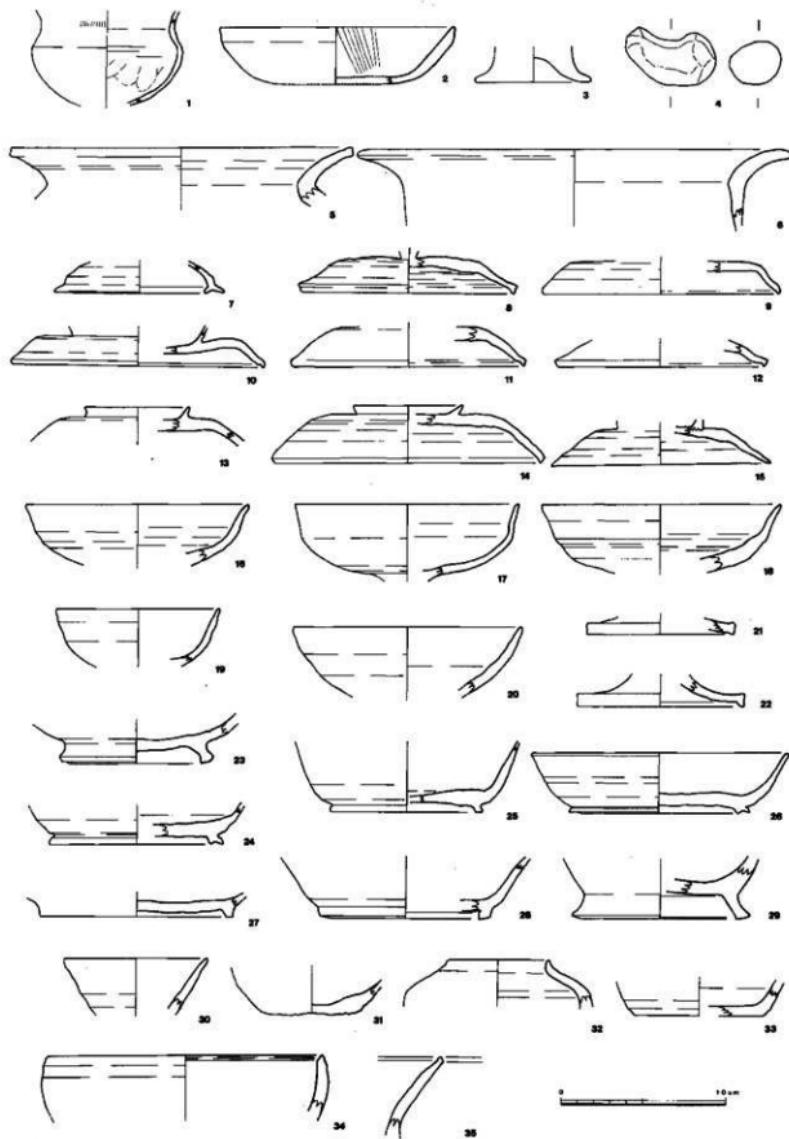
8層は、酸化鉄分を含み砂質性のある黄灰色土である。層厚は20~40cmを測る。この層は、調査区北端からさらに北側に向かって緩やかに上っており、北側に向かうほど厚く堆積していた。ちょうどこの周辺が、平地と砂丘との境に位置すると考えられる。9層は、5cm以下の礫からなる礫層で、茶色を呈する。5cm台の礫が所々に見られるが、層の中心は2cm大の礫であった。層厚は30cmを測るが、砂層が厚く



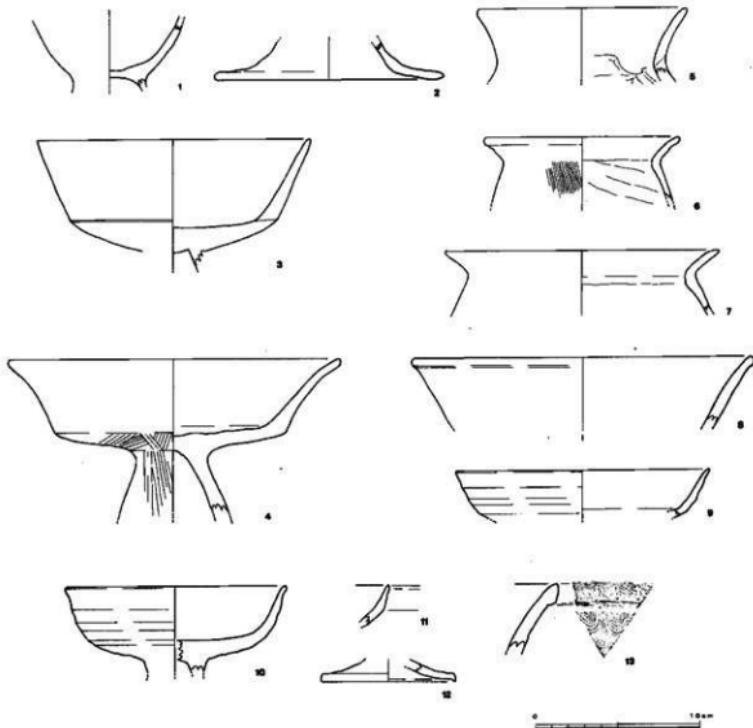
第5図 土層断面図



第6図 2層出土遺物実測図



第7図 3層出土遺物実測図



第8図 4層出土遺物実測図

堆積する状況に大雨が降ったことから調査途中に崩落し、不詳となってしまった。続く10層は、灰黒色を呈する粗い砂礫からなる砂礫層である。この層もまた8層と同様北側に向かって上っているのが確認できたが、9層同様途中の崩落により不詳である。層厚は、確認できる範囲で10~20cmを測る。

3. 検出遺構

本遺跡で検出した遺構には、川跡及びピットがあるが、層序あるいは遺物の出土状況から判断して、4層の暗茶色砂質土及び5層の黄褐色砂層を中心として構築されていたものと想定される。しかし、前項でも述べたように、調査対象地周辺が複数回の洪水に見舞われた場所であることや、砂層で検出してものであったことから、必ずしも原形を留めているとはいえない。とくにピットは、その境界が不明瞭なものが大半であった。

川跡は調査区のほぼ中央において検出された。肩部は不明瞭であり、その規模は確認できた範囲で幅2.8m、深さ0.9mを測り、東西方向に伸びる。上層の砂層である4層を切り込む堆積状

況から、上部は後世に若干削り取られてしまったと考えられたが、もともとの規模は若干広がるものと想定される。礫や砂礫が堆積する状況から、高津川の氾濫時に残された後背湿地の一部と考えられ、砂層を人為的に掘り込んだものではなく、自然発生的に流路となり、長期間流れたものではないと考えられていた。川跡内からは、土師器が検出されたが、砂地であることからその境は不明瞭であり、あるいは5層に含まれる遺物もあったのではないかと考えている。

4. 出土遺物

遺物は、弥生土器、須恵器、土師器などが出土しているが、遺構に伴うものはほとんどなく、ここでは各層位毎に採取されたもののうち、特徴的なものを中心として順に述べていきたい。

(1) 2層出土遺物（第6図）

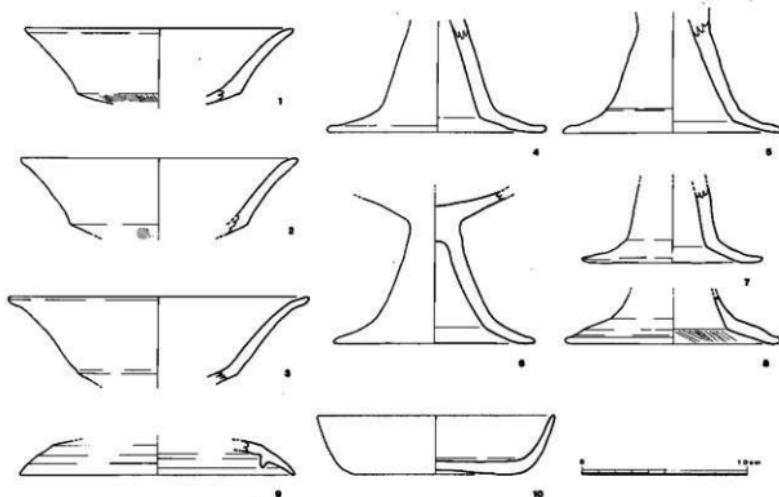
第6図1～5は、須恵器蓋である。1は、輪状つまみをもち端部を小さく折り曲げる。また、端部内側を曲げて面を持っている。2、3は、内側にかえりを持つタイプである。4は、端部を小さく折り曲げ、先端は鋭く尖る。5もまた端部を下方に小さく折り曲げるが、端部内側に面を持っています。

第6図6～10は、須恵器高环である。6、7、10は高环の环部で、6は体部が内湾気味、7は外反気味に立ち上がり、何れも口縁端部は尖り気味となる。

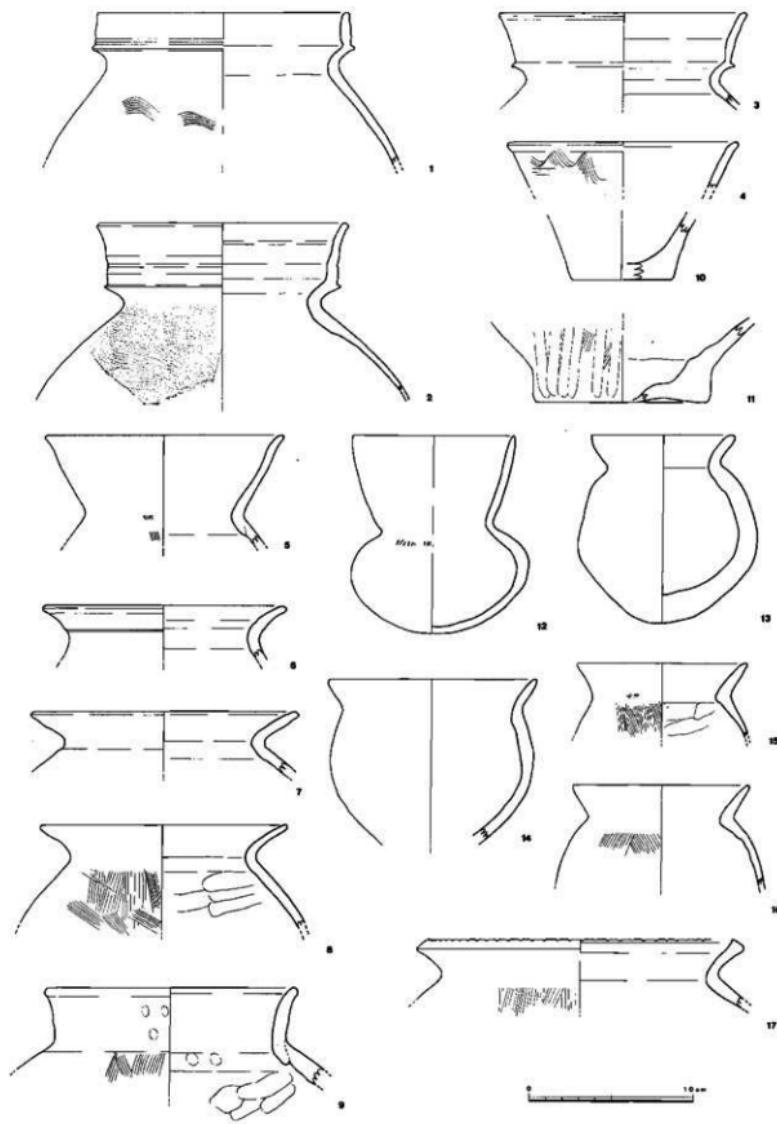
第6図11、19は須恵器壺である。11は口縁部が直線的に立ち上がり、端部上面に平坦面をもつていて。また、口縁端部外面に1条の沈線をめぐらす。

第6図12、20は須恵器壺の口縁部である。

第6図13～17は須恵器环で、13、14が口縁部、15、16、17が底部である。13、14は何れも体部が直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめるが、14は端部を外方にやや折り曲げていて。15、16、17は高台部分を外側に引き出し、面ではなく点での接地となっている。



第9図 5層出土遺物実測図（1）



第10図 5層出土遺物測定図(2)

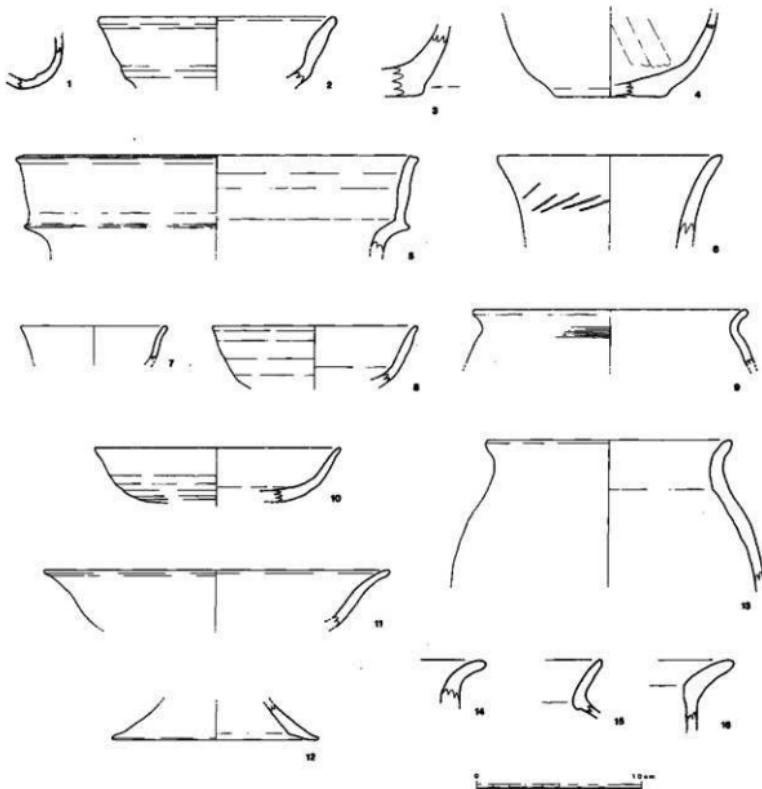
(2) 3層出土遺物 (第7図)

第7図1は土師器小型丸底壺である。器壁は薄く、やや肩部が張る倒卵形を呈している。

第7図2は土師器壺である。浅い碗形を呈し、口縁端部を上方に引き伸ばす。内外には赤彩を施す。

第7図7～15は須恵器蓋である。7は内側にかえりを持つが、8～15は端部を下方に小さく折り曲げる。また、8にはボタン状つまみが、9、10、13～15には輪状つまみがそれにつく。

第7図16～22は須恵器高壺で、16～20が壺部、21～22が脚部である。壺部は何れも体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。22は大きく聞く脚部で、端部を下方に小さく折り曲げる。



第11図 12層出土遺物実測図

第7図23～29は須恵器壺である。高台端部を外方に引き伸ばして点で接地する23、24、26と高台の断面形が台形状で面で接地する25、27～29の2つのタイプがある。

(3) 4層出土遺物（第8図）

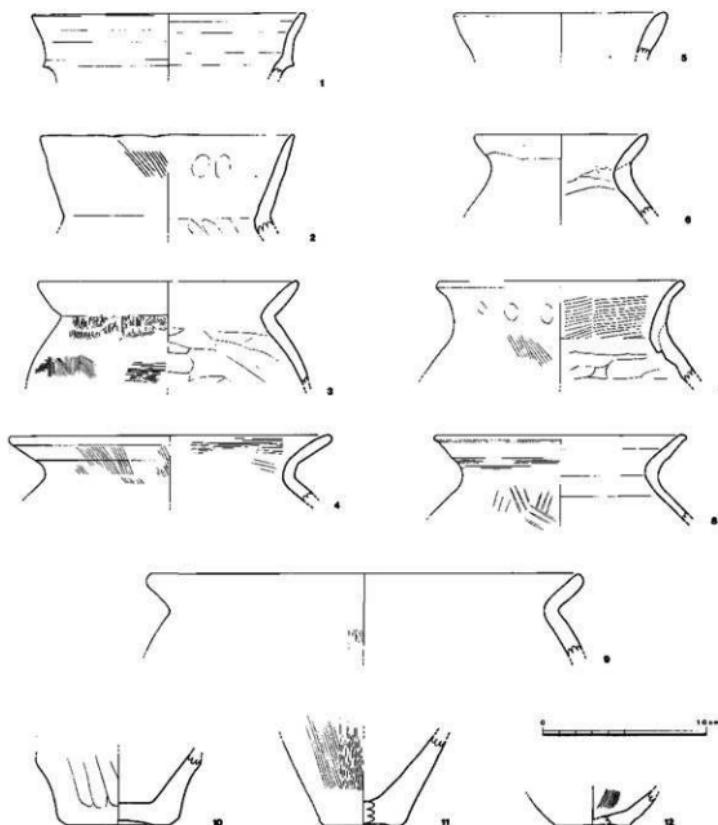
第8図1は、脚壺壺と考えられる土師器である。

第8図2～4は土師器高壺で、脚端部で屈曲して開く脚部の2、比較的深めの壺部を持つ3、4がある。

第8図5～8が土師器、9～13が須恵器である。

(4) 5層出土遺物（第9、10図）

第9図1～8は土師器高壺である。1～3は比較的大型で、深めの壺部を持つ。脚部は、脚端部で屈曲して開く4、7、8と比較的緩やかな弧を描いて開く5、6の2タイプがある。



第12図 川跡出土遺物実測図(1)

第9図9は、内側にかえりを持つ須恵器の蓋、第9図10は浅い碗形を呈する須恵器の杯である。
第10図1は土師器甕、2、3は弥生土器甕で、それぞれ複合口縁を持つ。

第10図4、5は土師器の壺である。

第10図6、7は土師器甕、8は土師器壺で、肩部から口縁部にかけての字状に大きく屈曲する。
第10図12～16は土師器の小型丸底壺で、口縁部が長く体部が倒卵形を呈する12と体部がやや膨らんだ球形を呈し短めの口縁がつく13～16の2タイプがある。

(5) 12層出土遺物（第11図）

第11図2～4は弥生土器甕、5、9、13～16は土師器甕である。

第10図7、8は須恵器高杯の杯部、10は須恵器杯である。

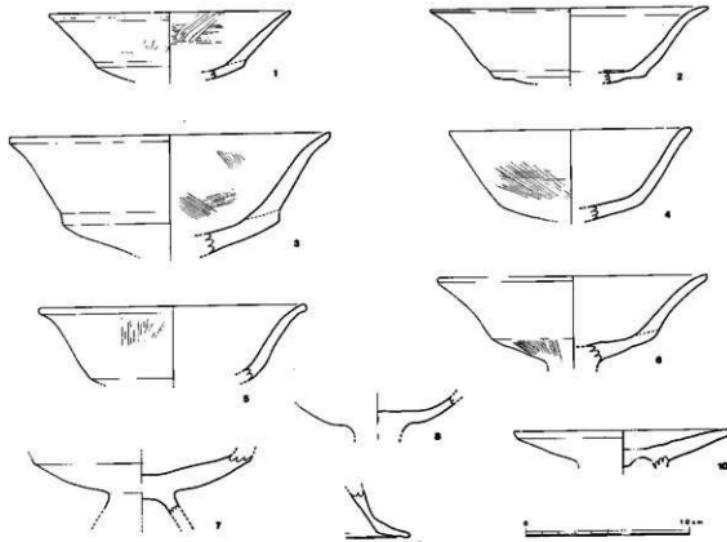
第10図11、12は土師器高杯で、11は比較的大型で浅めの杯部、12は端部内側に面を持つ脚部である。

(6) 川跡出土遺物（第12、13図）

第12図1、3、4、9は土師器の甕口縁部、2、5～8は土師器壺の口縁部である。

第12図10、11は弥生土器甕の底部、12は弥生土器壺の底部である。

第13図1～6、8、9は土師器高杯で、7、10は土師器器台である。杯部は比較的深めであり、杯底部と体部との境に段を持つ1～3と段のない4～6、8の2つのタイプがある。



第13図 川跡出土遺物実測図（2）

表1. 出土遺物觀察表①

表2 出土遺物觀察表②

IV. まとめ

発掘調査の結果、洪水などの自然災害あるいは人為的に移動された土砂に遺物が混在した可能性が考えられ、明確な遺構が発見されなかつた点については、上述の洪水の影響あるいは遺跡の中でも今回調査した範囲が縁辺部に位置し、遺構を持たない箇所であった可能性が考えられる。

高津川は現在の流路になるまでに幾度も流路を変え、時には氾濫を起こしていたことはこれまでの調査あるいは今回の調査で確認された土層の堆積状況からも明らかであり、調査地一帯は常に高津川の影響を受け水際に近い場所であったことは確かである。

出土遺物は古墳時代前半から飛鳥時代にかけての須恵器及び土師器を中心としたものであったが、必ずしも層序をなしていないのには、何度もいようどうが高津川の氾濫によるところが大きいのだろうし、土砂の堆積状況は長期間の蓄積というものではなく短期間に、一括りに堆積したものと見られ、付近に存在する遺跡部分の土砂が遺物とともに人為的に移動され、2次堆積した場所とも考えられる。また、出土した遺物にほぼ完形に近い遺物も見られることから、あるいは水際での祭祀に関わる場所であった可能性も考えられた。

なお、今回の調査では出土しなかつたが、一帯には広範囲にわたって中世の遺物も散布しており、浜寄遺跡の範囲や時代については幅広く想定しておく必要がある。

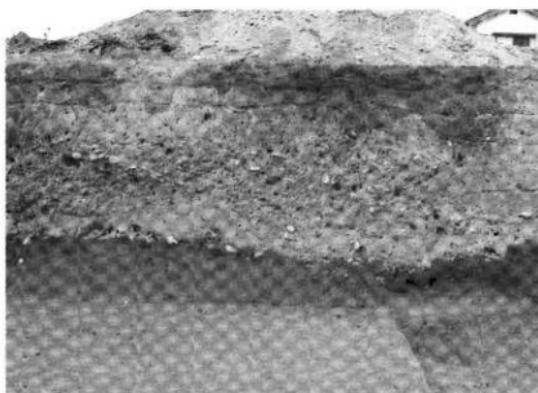
写 真 図 版



川跡完掘状況



川跡完掘状況



川跡土層堆積狀況



調查狀況



遺物出土狀況



調査前状況



完掘状況



土層堆積状況



遺構検出状況



溝跡完掘状況



遺物出土狀況

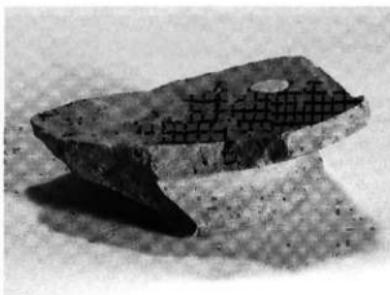
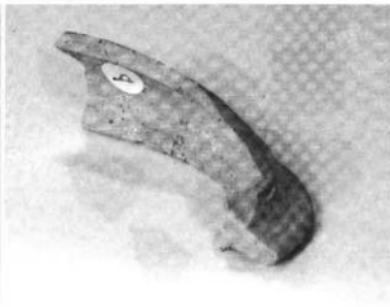
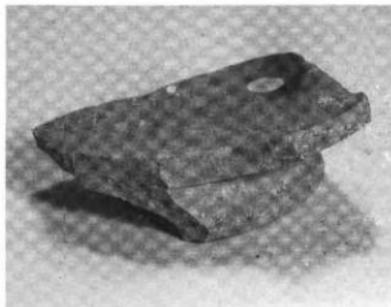
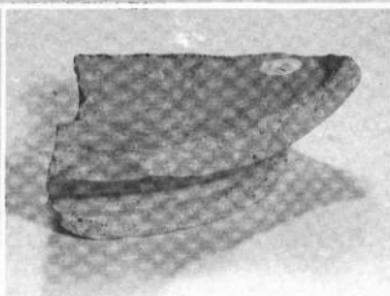
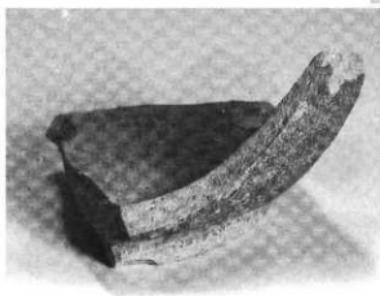
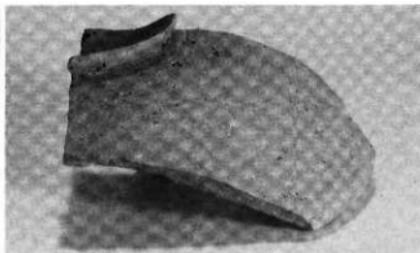


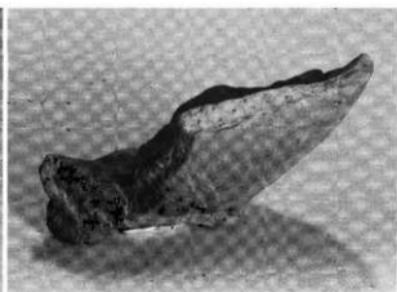
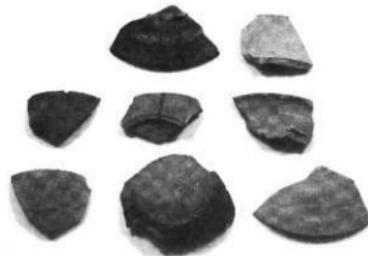
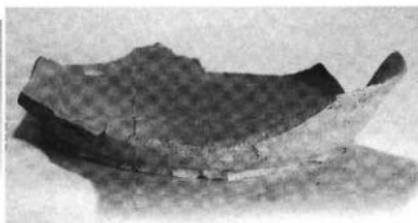
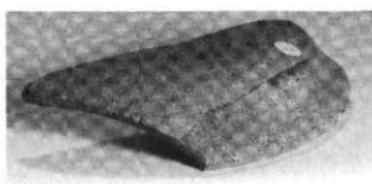
遺物出土狀況

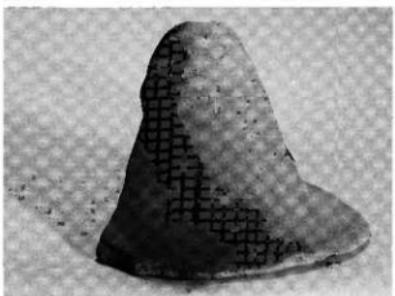
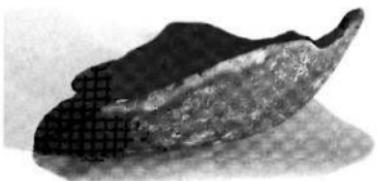
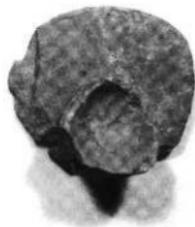
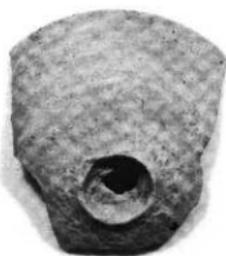
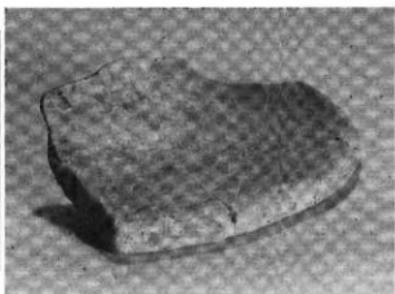
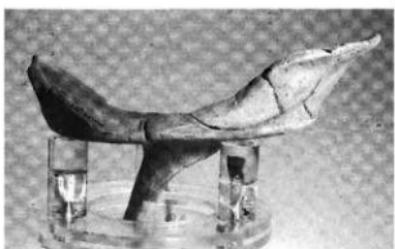


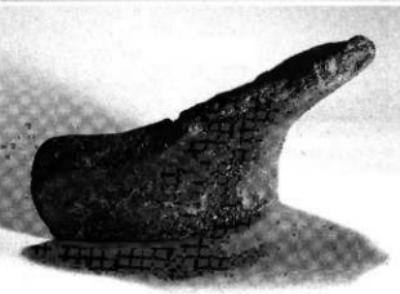
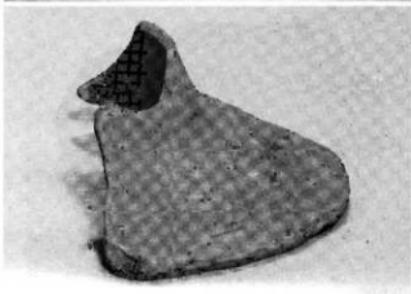
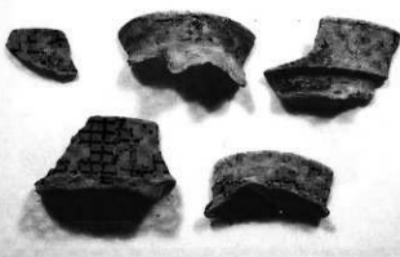
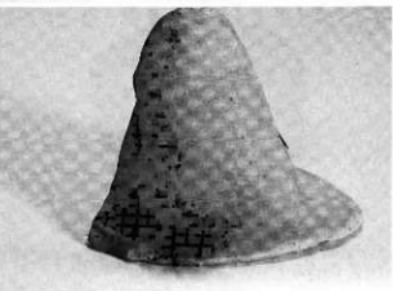
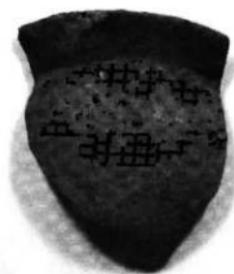
遺物出土狀況

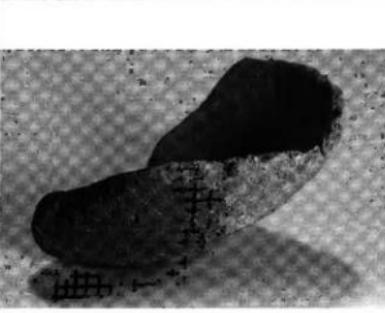
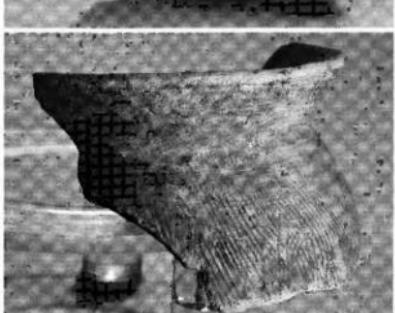
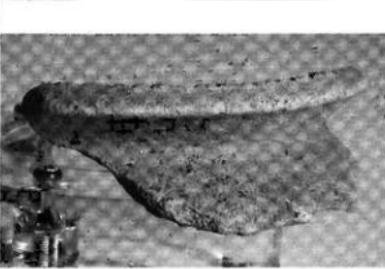
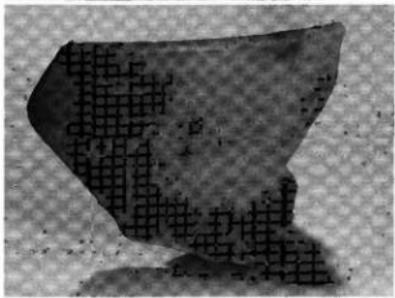
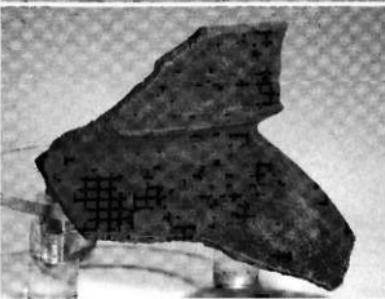
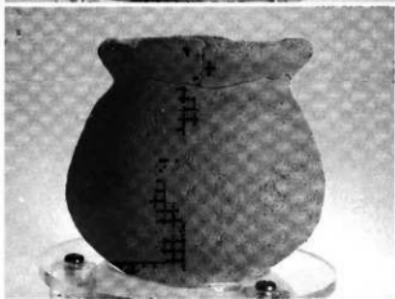


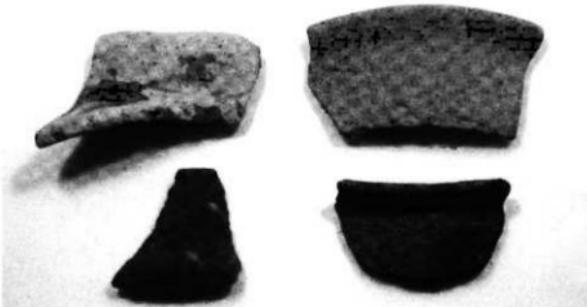
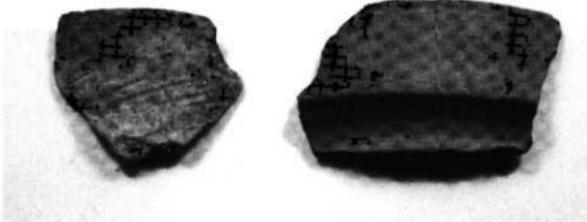
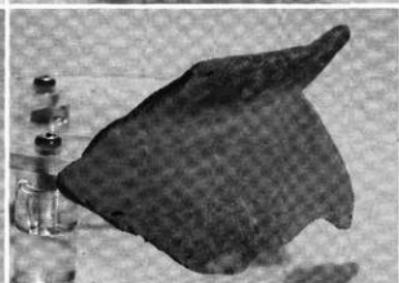
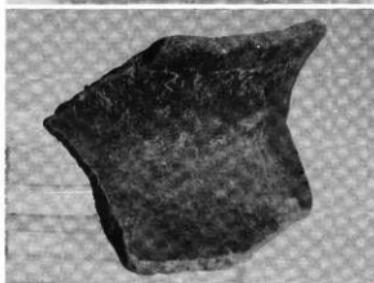
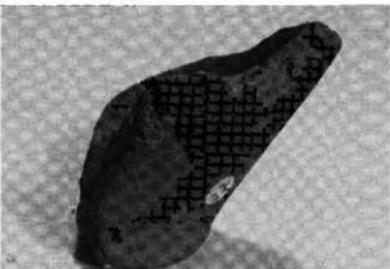
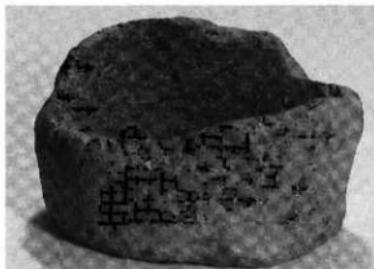


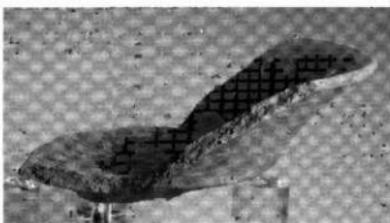
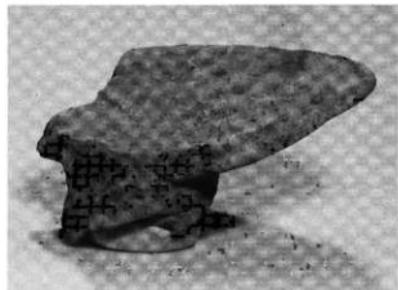


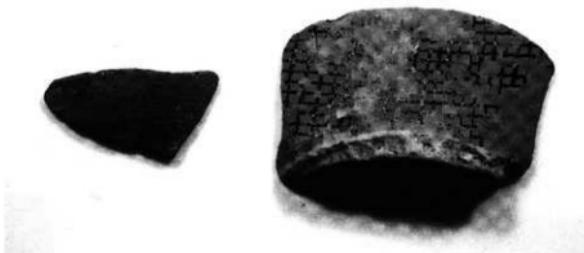
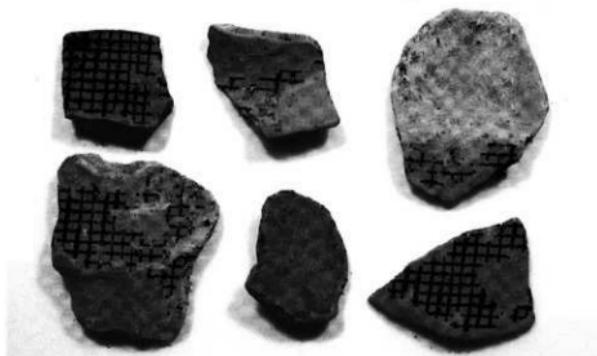
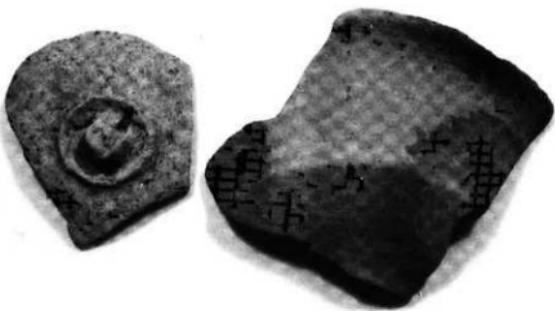












浜 寄 遺 跡

益田道路関連浜寄代替地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成15年（2003年）3月発行

編集・発行 益田市教育委員会

島根県益田市常盤町1番1号

印 刷 西 村 印 刷 所

島根県益田市高津六丁目27番8号
